●巻頭言

温 故 知 新

An Attempt to Discover Newthings by Studying the Past Through Scrutiny of the Old

坂 井 明 美 (Akemi SAKAI)*

第15回日本助産学会学術集会会長

職業人としての助産婦の身分を全国レベルで確立させた「産婆規則」は、1899年（明治32）7月18日に公布された。実に新産婆の誕生である。この歴史的事実を記念して1999年9月19日には日本助産婦会、日本看護協会、全国助産婦教育協議会、日本助産学会、全国助産婦教育研究会の共催による、産婆規則規定100周年記念式典・フォーラムが東京都で開催されている。

「産婆規則」が制定されたころの日本の教育制度といえば、1872年（明治5）に「学制」がしかれ、初等教育は義務化されていたものの、就学率は1882年（明治15）には女子31%、男子65%であった。女性も半数に達したのは1897年（明治30）以降とされる。やがて女子初等教育の就学率の上昇に伴い、上級学校への機運が高まり、1891年（明治24）に先に公布されていた「中学校令」の改正で尋常中学校の一種として「高等女学校」が4年間の修業期間で規定された。当時女子の高等教育は女学校までとされ、他に女子教育は産婆や女子師範学校が何校かあれば足りるとされた風潮にあった。教育内容は1898年（明治31）に公布された家族制度を支える良妻賢母主義の内容を網羅し、男子とは異なる教科編成であった。このことは女子の一般教育のみでなく、当然他の女子教育にも浸透している。例えば、1912年（明治45）6月に公布された私立産婆学校産婆講習所指定規則の中にも垣間見ることができるように、修身や礼法等の科目が設けられていて、この流れは1949年（昭和24）の保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の公布まで継続されることになる。

家父長制の中にあっても自立への志向に目覚めた女性たちがいて、その中には日本で最初の女性文学誌『青靑』を発刊し、「元始、女性は実に太陽であった」と唱えた平塚らいてうや長沼智恵子（のちの高村光太郎夫人）、野上弥生子等がいた。

一方、リプロダクティブヘルスでの第一人者として特筆すべきは石本（加藤）シズエであろう。石本は石本恵吉男爵と結婚後、夫の赴任先の三池炭鉱で、上半身裸で働く女性、出産間近まで働く女性や時には坑内

での出産の光景を目のあたりにする。さらに貧困と無知のためにわが子を虐待せざるをえない母親の現実も知ることになる。やがて夫の勧めもあり渡米して秘書学を学ぶのであるが、そこでマーガレット・サンガー夫人との出会いがあった。帰国後には日本産児調節連盟を発足し、以後長期間にわたり国会議員として活躍し1974年（昭和49）には政界を引退した。現在もなおリプロダクティブヘルス／ライツの立場に身を投じ、社団法人日本家族計画連盟会長として活躍し、明治・大正・昭和そして平成と歴史の流れで輝いて生きてきた女性のお手本として、私たちに多くの示唆を与え続けた存在である。国家主義の家父長制の時勢の中に吞み込まれないで、凜として「家庭」と「職業」を両立した「良妻賢母」の姿を、筆者は平塚らいてうや加藤シズエにみるのである。

昨今、毎日のように報道されている、親や大人からの子どもに対する虐待、子どもによる親や教師等に対する暴力、あるいはドメスティックバイオレンス、このような社会病理現象は、急速に高度成長し、価値観の多様性の中で育った人たちが大人となり、親となった事実を考えれば、人は好むと好まざるとにかかわらず、環境に染まり染められていくことを実感させるをえない。

助産婦職が生涯にわたっての女性の健康への支援者であるならば、現代に即した「良妻賢母」と「良夫賢父」を育む役割も果たせられるだろう。とすれば私たちは何に向かって自己の指針を合わせ研鑽したほうがよいのだろうか？

文献

- 1) 総合女性史研究会：日本女性の歴史—文化と思想—、角川書店、1993。
- 2) 女性学年報編集委員会：女性学年報第12号、日本女性学研究会、1991。
- 3) 金森トシエ、藤井治枝：女の子教育100年、三省堂、1979。
- 4) 加藤シズエ：ふたつの文化のはざまから—大正デモクラシーを生きた女、青山館、1985。

* 金沢大学医学部保健学科 (School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kanazawa University)